尺度使用マニュアル

＜尺度名＞

General Procrastination Scale 日本語版（先延ばし尺度）

＜測定概念＞

本尺度によって測定する概念は先延ばし傾向（procrastination）である。先延ばし傾向とは，達成する必要のある取り組みを遅延させる行動傾向とされる。本尺度の代表的な特徴として，(a) 学業領域に限定されない項目が選定されているために適用範囲が広い点，(b) 国外で最も頻繁に使用されてきた先延ばし尺度の一つである General Procrastination Scale（GPS）の翻訳版のために国内外の比較が可能である点，(c) 国内外の研究において妥当性と信頼性が支持されている点，が挙げられる。

＜想定される適用範囲＞

18 歳以上の全ての集団で，日本語の読解が可能な者であれば適用可能である。

＜尺度構成手続き＞

Lay（1986）が作成した GPS について原著者の許可を得て日本語訳を行った。翻訳に際しては，日本人バイリンガルによるバックトランスレーションを実施した。さらに予備調査における分布と項目内容における文化差と年代差を考慮し，原項目と意味が変わらないように留意して若干の語句の改変を行った。項目分析と因子分析を経て最終的に適切と判断された 13 項目を GPS 日本語版とした（詳細は文献参照のこと）。なお，信頼性と妥当性は以下の 3 つの調査において確認されている。

1. 大学生および専門学校生174 名を対象に，項目の選定，因子的妥当性，内的一貫性，構成概念妥当性(API)を検討した。
2. 専門学校生 77 名を対象に，構成概念妥当性（SDS，STAI-S，行動指標）を検討した。
3. 大学生 222 名を対象に，再検査信頼性を検討した。

＜信頼性＞

α係数は.87 であり，十分な内的一貫性があるといえる。 再検査信頼性(5 週間)についても男女別および男女込みで.70~.74 が確認された。

＜妥当性＞

先行研究と一貫する 1 因子性が示されており，因子的妥当性が支持されている。また，学生用の先延ばし尺度 API との相関は.77 (p<.01)であった。抑うつを測定する SDS，不安を測定する STAI-S ，行動指標として宿題開始および宿題完了までに要した日数との相関

は，それぞれ.24 (p<.05)，.36 (p<.01)，.19 (p<.10)，.31 (p<.05) であった。これらの結果は，本尺度の構成概念妥当性を支持するものである。

＜採点方法＞

教示文は“次の文章について，あなた自身にどの程度あてはまるかをお尋ねします。以下の質問に対する回答として，もっとも適切だと思う数字に○をつけて下さい。”である。回答方法は，1.「あてはまらない」から 5.「あてはまる」までの 5 件法である。なお，項目 6,8,11,13 は逆転項目であるため，得点を逆転させる。その上で，全項目の合計得点を先延ばし傾向得点とする。この得点が高いほど，先延ばし傾向が高いことを示している。

＜尺度の使用について＞

項目の改変はおこなわない方が望ましい。

（出典文献）

林潤一郎 (2007). General Procrastination Scale 日本語版の作成の試み――先延ばしを測定するために　パーソナリティ研究，15, 246-248.

林潤一郎 (2007). 先延ばしの安定性―General Procrastination Scale 日本語版の再検査信頼性の検討を通して―　　日本心理学会第 71 回大会発表論文集，　278.

＜連絡先＞

林潤一郎（東京大学大学院　教育学研究科）

jun@p.u-tokyo.ac.jp

＜無料・有料の別＞

無料。

＜著作権関連情報＞

転載は著者の承諾を得てください。研究目的での使用は自由ですが，著者にご一報いただければ幸いです。